

温泉地活性化と地域内部の人的要因

——山形県米沢市小野川温泉を事例に——

山田 耕 生

I. はじめに

日本書紀に下呂や有馬、白浜といった温泉地が記載されているところから温泉浴は日本人の好みであり、江戸時代から今日まで温泉地は観光地の中核を担ってきた。

とりわけ、1960年代からの高度経済成長とともに旅行の大衆化が進むと、それまでの湯治場から方向転換を図り、大型化した旅館・ホテルが建ち並ぶ歓楽的な色彩の強い温泉地が各地に出現した。

その後、1988年の竹下内閣で導入された「ふるさと創生」事業による温泉掘削がブームとなると、日帰り温泉施設が各地に誕生した。

その間において、湯治場から端を発した温泉地は、宿泊施設の規模の面では一軒宿の秘湯から、大規模旅館に支えられている歓楽型温泉地まで、立地の面からは自然環境に優れた温泉地から、都市部にある温泉地まで、多様化しながら増加してきた。

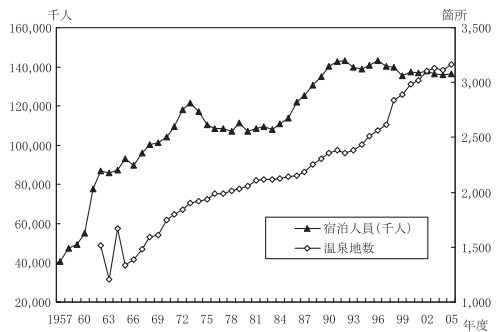
しかし、1990年代に入り、温泉地は総体的に低迷していく(第1図)。なかでも、バブル景気が終息し、それまで温泉地を支えてきた大型旅館の経営が悪化した温泉地や、団体客の減少と増加した個人客、女性客への対応が遅れた旅館や温泉地では、入込客の減少傾向が続いている¹⁾。

そのような、全体的な温泉地の低迷の中でも、入込が増加を続け、人気を集めている温

泉地がある。秋田県乳頭温泉郷や群馬県法師温泉など、山間部に位置し、一軒宿の優れた自然環境に恵まれた温泉地や、熊本県黒川温泉や大分県由布院温泉など、周囲の景観や自然環境を活かした温泉地づくりを進めてきた温泉地などである²⁾。

特に後者のタイプの場合、施設や料理のレベルアップといった個別旅館の経営努力もさることながら、温泉街の情緒演出など温泉地全体での魅力づくりが鍵となっており、今日の温泉地活性化の潮流となっている³⁾。実際、足湯や散策路などの整備が各温泉地で多くみられるのも、こうした傾向の現れといえる。

以上のような状況のもとで、近年、観光学や地理学でも温泉地の活性化に関心を寄せており、議論や研究が行われている。観光学の



注：温泉地数は宿泊施設のある場所を計上
資料：環境省自然環境局「温泉利用状況」より作成

第1図 温泉地と宿泊者数の推移

注：温泉地数は宿泊施設のある場所を計上
資料：環境省自然環境局「温泉利用状況」より作成

分野では、日本観光研究学会では 2006 年度全国大会のシンポジウムのなかで温泉地の再生に関する議論を行っており、加賀温泉郷の地域活性化について報告されている⁴⁾。さらに同学会では温泉地の再生・活性化に関する研究懇話会を 06 年 7 月に開催している⁵⁾。地理学の分野では、温泉地研究の先駆者である山村⁶⁾ は兵庫県湯村温泉、群馬県四万温泉などを事例に、これからの温泉地のありかたを「癒し」や自然環境を重視した「持続的温泉地」、「滞在型温泉地」へ向かうと指摘している。さらに、溝尾⁷⁾ は温泉地の今後の方向性として、「ヒューマン・スケール」、「長期滞在」、「自然に調和した町並み景観」の 3 つのキーワードを挙げ、温泉地づくりに取り組むべきだと主張している。

このように、現在、温泉地の活性化方策が議論されているなかで、温泉地全体で活性化に取り組むことが重要とされており、この点については異を唱えるつもりはない。しかし、上述のような活性化方策への指摘があるにも関わらず、旅館経営者同士の連携や観光協会等のまとまりに欠けるなどの理由から、地域活性化が進まない温泉地も多い。今後は、温泉地活性化への取り組みに過程において、その中核を担う旅館経営者や商店主、一般住民などがどのように連動し、展開されたのかについての研究の蓄積も望まれる。

そこで本研究では、旅館経営者等の若手を中心とした組織による取り組みが、温泉地活性化の成功例⁸⁾ として評価されている山形県米沢市小野川温泉を事例に取り上げ、温泉地活性化への過程を明らかにする。また、本研究では、温泉地活性化に向けて主導的な役割を演じた人々や組織に注目し、それらの属

性等の面から、活性化への取り組みを推進することができた要因を考察する。

研究は次の手順にしたがって進めていく。はじめに、小野川温泉における観光活性化の変遷と現状を明らかにする。次に、2001 年以降の観光活性化の中核を担った組織である「観光知実行委員会」に焦点を当て、組織の特徴と構成メンバーといった人的側面からの活性化要因を考察していく。そして、一連の結果を小括した後で、小野川温泉の観光活性化の今後の方向性に言及することで結びかえる。

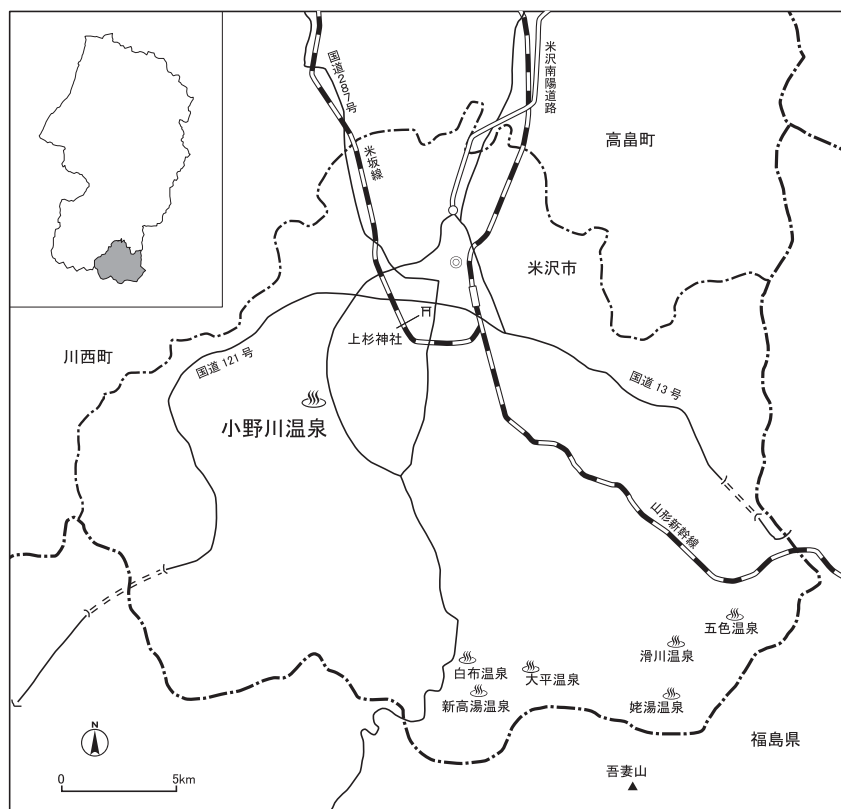
なお、小野川温泉の活性化については小林⁹⁾ による研究がある。そこでは、温泉それ自体の観光価値の考察を試みている。したがって、研究の目的および考察の方向性は本研究とは本質的に異なっているが、小林論文で紹介している温泉地活性化の過程や観光知実行委員会の取り組みなど、本研究の論文構成の性質上、紹介しなければならぬ箇所もあり、その場合は、適宜解説を加える。

II. 小野川温泉における観光活性化の取り組み

1. 小野川温泉の概観

小野川温泉は山形県の南端部、福島県と県境を接する米沢市の中心部から南南西 7 km の位置にある。温泉街の中央を南北に最上川の源流、大樽川が流れ、東西および南方は小高い山が囲まれた盆地となっている（第 2 図）。大樽川周辺はホテルの生息¹⁰⁾ で知られており、環境庁自然保護局認定「ふるさといきものの里」に指定されている。

温泉街の中央に小野川温泉のシンボルとも



第2図 小野川温泉の位置

言える共同浴場の「尼湯」があり、尼湯を取り囲むように旅館が数軒建ち並び、さらにそれらの周辺に旅館が点在している。

約1,200年前、平安時代の歌人、小野小町が父親を探す旅の途中で発見したと伝えられる歴史の古い温泉（第1表）で、小野川の「小野」という名前も小野小町に由来している¹¹⁾。その後、江戸期に入ってから現在の温泉街の基礎が形成された。明治期から昭和初期にかけては、米沢市内の農家や商工業者などによる湯治利用で賑わった。戦後になり、1960年代からの高度経済成長により生活様式が変化するようになると、小野川温泉への湯治客の割合も低下し、今日の温泉地に見ら

れる1泊2食付の料金体系の旅館経営にシフトしていった。

小野川温泉のある米沢市小野川町の人口は2002年時点で665人、世帯数は196戸である。そのうち、旅館や土産物店などの観光関連の従業者の比率は2割で、残りの約8割が会社員など、観光業とは直接関わりをもたない住民で構成されている。

小野川温泉には、2006年10月時点で17軒の宿泊施設がある。温泉地全体での部屋数は290室、収容人数1,250人であり、1軒当たりの平均は、部屋数17室、収容人数70人である。施設の規模に大きな差はなく、比較的小規模の旅館が建ち並ぶ温泉地である。その

他に、土産物店、飲食店があわせて10軒ほどある。

小野川温泉の観光資源としては、小野小町ゆかりの史跡や弘法大師作の甲子大黒天を祀る甲子大黒天本山など、歴史的・文化的な人文観光資源が多い。温泉街の周囲には、ホテル公園や小野川スキー場等の自然観光資源やレクリエーション施設がある。上記の観光資源を有しているものの、それらが単独で小野川温泉への強い誘引力を持っているとは言えず、小野川温泉への入込客はほぼ全て温泉への入浴を目的に来訪する。温泉施設としては、共同浴場2か所、無料露天風呂1か所が

あるほか、足湯や飲泉所が温泉街に点在している。

2. 小野川温泉における観光活性化の変遷

小野川温泉において、地域全体でのまちづくりに関する出来事としては、1955年に旅館が集まり「小野川温泉旅館組合」が組織されたことが始まりである。そして、1960年代に入りまちづくりの具体的な取り組みを開始した。まず、温泉街全体について協議する機関として、1962年に旅館や一般住民などから構成された「小野川温泉街協同組合」が発足し、温泉街の街灯の整備を行った。1965年には源泉を所有あるいは使用する旅館や一般世帯

第1表 小野川温泉年表

年	小野川の出来事
834	小野小町、小野川の里に來り開湯
1587	伊達政宗、23歳のとき足を骨折し、小野川に湯治
1773	米沢藩主上杉治憲（鷹山）小野川を視察
1923	小野川スキー場開設
1929	米沢駅と小野川間に銀バスの運行が開始
1957	小野川温泉観光（株）が設立し、小野川スキー場が拡張・リフトが架設
1962	小野川温泉街協同組合設立。街灯の新調・整備を行う
1965	小野川源泉協同組合設立。源泉の集中管理を行う
1977	全国ホテル研究会を小野川で開催
1981	第一回小野川温泉はたる祭り開催
1989	小野川のホテルが環境省の「ふるさと生き物の里」に認定。ホテル公園完成
1995	第一回小野小町サミットを小野川で開催
2001	JR 東日本 & JTB の若手勉強会が小野川に來訪 観光知実行委員会発足 第34回全国ホテル研究大会が小野川で開催 夢ぐり（湯ぐり）開始、湯あみ旅情が開始 日経新聞社の「温泉大賞」で「まちづくり賞」受賞
2002	無料露天風呂・足湯・飲泉所が完成、街灯が更新
2003	インフォメーション施設「片葉の葦」完成 佐藤雄二河鹿荘社長が国土交通省の観光カリスマに認定
2004	小野川温泉観光協議会が山形しあわせ産業賞を受賞

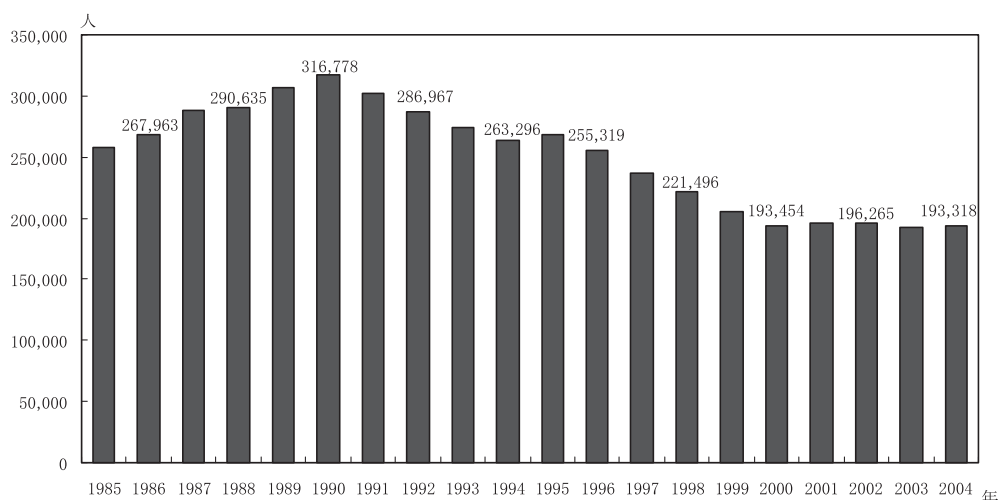
（小野川温泉観光協議会 蔦 幹夫氏への聞き取りをもとに作成）

によって「小野川温泉源泉協同組合」が発足し、源泉の管理を行っている。1978年には、大樽川とその周辺に生息するホタルの保護とそれによる水環境の維持や啓蒙を行う目的で「米沢ホタル愛護会」が発足した。

小野川温泉全体での観光振興という側面からまちづくりが図られ始めたのは、1980年に米沢市が策定した「米沢市観光レクリエーション基本計画」¹²⁾が契機となった。これは、米沢市の観光振興のためのマスタープランであり、小野川温泉についても言及している。さらに、翌年に小野川温泉だけの計画策定を行っている。その計画では小野川温泉について、歓楽型ではなく保養型の温泉地を目指すこと、具体的には温泉街中心部への自動車乗り入れを規制し、歩行者中心のモール化するよう提案がなされた。しかし、当時は車社会が進行中でそのための整備に多額の資金がかかることなどの理由から計画への反対意見が多数を占め、計画は頓挫した。しかし、この

計画策定によって、小野川温泉の現状や問題点が客観的に提示され、地域全体での観光振興を考えることへの必要性を意識するきっかけとなった。当時は、米沢市内の他の温泉地である白布、滑川、姥湯、大平の各温泉では東京など広域からの観光客を集めていたが、小野川はこれといった特徴のない田舎の温泉地となってしまう、山形県内と隣接する福島市からの宿泊客が圧倒的であった。

翌1981年には旅館や商店主などにより、「小野川温泉観光協議会」が発足し、同年、観光協議会の主催のもと「第1回ほたる祭り」が開催された。ほたる祭りは、大樽川周辺に生息するホタルを観賞する祭りで、6月中旬から約2週間にわたり開催される。期間中は温泉街中心部でさまざまなイベントが行われる。祭りの企画や運営は観光協議会の青年部で組織された「ほたる祭り実行委員会」が中心となって行われるが、それらへの参画によって温泉街全体での結束力が強まっている側面が



第3図 小野川温泉への入込客数（日帰り・宿泊合計）

（米沢市商工観光課資料より作成）

ある。ほたる祭りは2006年には26回目が開催されたが、現在では小野川温泉で最も大きなイベントとなっている。

小野川温泉への入込はバブル景気のもと、全国的な温泉地と同様に1980年代は増え続けたが、1990年の31万7千人をピークに以降は減少に転じた。2000年には19万3千人と、10年間で3分の2にまで落ち込んだ(第3図)。

小野川温泉にとって、観光まちづくりの転機となったのは、2001年に鉄道会社(JR東日本)と旅行会社((株)JTB)が共同での旅行商品開発のプロジェクトチームを発足させ¹³⁾、その企画対象地に小野川温泉が選ばれたことである¹⁴⁾。具体的には、小野川温泉を特集した旅行商品、いわゆるパッケージツアーを企画し、旅行者に販売するというものである。ここでは、旅行商品の販売はJR東日本とJTBが協力して行いが、旅行商品の企画に関しては、対象地である小野川温泉の住民によって目玉となるプランの開発を担当するという役割分担のもとでのJR東日本とJTBからの提案だった。このような提案を受け、小野川温泉では企画立案や具体的活動の中心となる組織として、「観光知実行委員会」を発足させた。観光知実行委員会は、観光協議会の青年部を中心に構成された「ほたる祭り実行委員会」がほぼそのまま名称を変更させた形となっている。観光知実行委員会のメンバーは、旅館や土産物店などの観光関連業のほか、地元の一般商店、食堂、畳屋などのさまざまな職業から構成されている。

発足後、観光知実行委員会は「議論は徹底に」、「情報はすべて公開する」、「全員で役割分担を」、「地域一体を心がける」、「スピード感を大事にする」の5つをスローガンに掲げ、

旅行商品開発のため、度重なる議論を行った。2001年4月に最初の会議が行われてからJR東日本・JTBに提案する期日の5月中旬までは、ほぼ連日会議が行われた。その結果、観光知実行委員会では「まち(小野川温泉)全体でお客を迎えること」、「ホスピタリティー溢れるまちづくりを目指すこと」というコンセプトのもと、「お楽しみプラン」として以下の具体的プランが提案された。

- a 夢ぐりプラン
- b そぞろ歩きお休み処の設置
- c どこでも出前
- d 無料のレンタサイクル
- e 朝市

これらの各プランは、準備にコストがかからないソフト面を重視した企画立案といった、JR東日本・JTBからの意向を反映させたものになっている。このようにして造成された旅行商品は、同年9月、JR東日本・JTB両社から合同で発売された。お楽しみプランの特徴として、小野川温泉内の各旅館、食堂、土産物店などが足並みを揃え、協力体制があって初めて実現できるプランばかりということである。例として、「夢ぐりプラン」では1,000円の入浴手形として土産物店の独楽を購入すると、旅館15軒と共同浴場のなかから3か所の入浴ができるというものである。その他でもプランの成立において、観光知実行委員会の各メンバーの連携を必要とするものばかりである。

その後、小野川温泉への入込客数は2001年にそれまで続いていた減少から増加に転じ¹⁵⁾、以降は横ばいを維持している。2004年は19万3千人となっている。

このように、JR東日本およびJTBによる

旅行商品造成の対象地への選定という経緯はあるものの、観光知実行委員会の発足と一連の観光地づくりに対して、2002年には日本経済新聞プラス1温泉大賞の「街づくり部門賞」を受賞した。さらに、2003年には観光知実行委員会の委員長である旅館主のS氏が国土交通省により「観光カリスマ」に選定された¹⁶⁾。

3. 小野川温泉の観光の現状

小野川温泉内の宿泊施設への統計によると、2005年の入込客数は12万人であり、2001年と比較すると1万人減少している。そのうち、宿泊客数は10万3千人で全入込客の86%を占めている。小野川温泉への来訪客のほとんどは、旅館や公衆浴場での温泉入浴を目的としている。旅館では日帰り入浴客を受け入れているところも多いが、基本的には宿泊客の利用を原則としているため、宿泊客の割合が多くなっている。このほか、このデータには含まれていないが、大樽川沿いのホテル公園脇に2002年に新しく整備された無料露天風呂

への入浴を目的に米沢市周辺から日帰りで訪れる人も多い。

山形県内、県外別の入込客の比率をみると、2005年ではそれぞれ57%、43%であり、県内客の比率が高い。しかし、2001年の県内客の比率は71%であり、ここ数年は県外客の増加によってその比率を上昇させている。JRとJTBによる宣伝効果や観光まちづくりが評価されたことによる知名度の上昇によるものだといえる。

2005年度の月別の入込客数の割合をみると、10月が1万4千人と最も多く、2月が7千人と最も少ない。季節性に着目すると、夏期(5月～10月)55%、冬期(11月～翌年4月)45%の比率となっている。ただし、米沢市内にある観光施設への月別変動と比較すると夏期の比率が低く、10月を除いては月ごとのばらつきは小さい。

2006年9月に行った宿泊施設へのアンケート調査から、小野川温泉の宿泊施設および、

	設立年	役職	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006年度
観光協議会	1981年	会長	旅館A氏				旅館B氏		旅館C氏	
		副会長			商店A氏/旅館C氏				商店A氏/土産店B氏	
源泉協同組合	1965年	組合長						旅館D氏		
		専務理事						旅館E氏		
旅館組合	1955年	会長	旅館F氏				旅館C氏			
		副会長	旅館C氏				旅館G氏			
商業組合		会長					商店A氏			
		副会長					土産店A氏			
観光知実行委員会	2001年	会長					旅館S氏			
		副会長			旅館B氏		土産店B氏		旅館H氏/土産店A氏	

第4図 観光関連組織の役員の変遷

(現地での聞き取り調査により作成)

宿泊客の特性をみると次の通りである。宿泊施設での1人1泊当たりの消費金額は、1万円～1万2千円に64%の宿泊施設が集中している。最も高い回答は1万2千500円、最も低い回答は5千円である。1996年との比較では、半数以上の宿泊施設が横ばいと回答している。小野川温泉には1泊数万円の料金といった高級旅館は見られず、1万2千円を基準として、前後幅の小さい料金設定をしている旅館が集中している。

来訪率については、年間宿泊客数に占める年間2回以上来訪する宿泊客（リピーター）の割合は、「40%」が27%と最も多く、次いで「30%」、「70%」が20%、「20%」、「80%」が13%となっている。リピーターが「3割～4割」を抱える宿泊施設が約半数の一方で、「7割以上」も40%を占めている。小野川温泉への宿泊客は、リピーターが多いのが特徴である。

Ⅲ. 観光知実行委員会の特徴と観光まちづくりに果たした役割

小野川温泉のように地域全体を一体的に捉え、観光まちづくりに取り組み、成果を挙げるには、地域内部での各組織の関係が良好であることが必要である。さらに中心を担う組織が強いリーダーシップを発揮していくことが求められ、それには組織内の人的資源の質と量が要求されてくる。

本章では、上記の視点から2001年以降の小野川温泉の観光まちづくりへの取り組みを考察するため、中心的な役割を担った観光地実行委員会と小野川温泉内の他の組織との関係、委員会メンバーの属性を明らかにする。

1. 観光知実行委員会と小野川温泉各組織との関係

第4図は、小野川温泉における観光まちづくりに関わる各組織の連関図である。このうち、「小野川温泉観光協議会（以下、観光協議会と略称）」は小野川温泉で会員が最も多い組織である。観光協議会の中に、「小野川源泉共同組合（以下、源泉組合と略称）」、「小野川温泉旅館組合（以下、旅館組合と略称）」、「小野川温泉商業組合（以下、商業組合と略称）」が含まれている。このうち、旅館組合は旅館12軒、商業組合は飲食、商店、その他商業活動者48軒によって構成されており、組合員は自動的に観光協議会への加入になる。源泉組合は小野川温泉に4か所ある源泉の管理と適正な利用を目的とした組織であり、源泉の所有権がある旅館・共同浴場・個人23団体から構成されている。源泉組合員の観光協議会への加入は任意となっている。各組織の歴代首長、副長の系図をみると、観光協議会の副会長は、旅館組合、商業組合の組合長が務める仕組みになっている。

観光知実行委員会は先述のとおり、観光協議会の青年部のうち、観光協議会、旅館組合、商業組合の役職者を中心とした50歳以下の会員から構成されている。さらに、青年部ではないが、年配者として観光協議会、旅館組合、商業組合の会長、組合長も観光知実行委員会の委員として加わっている。これは、観光知実行委員会の活動を各組織が理解し、サポートする役割を踏まえてのものである。ところで、源泉組合長は観光知実行委員会に加わっていない。これは、組合長の息子が観光知実行委員会に入っているため、議論のしやすさを考慮したものである。

2. 観光知実行委員会の特徴

(1) 2001年発足時の観光知実行委員会

第2表は、2001年に発足した当時の観光知実行委員会のメンバーの属性である。なお、観光知実行委員会のメンバーは、観光協議会の会員から構成されるという性格上、旅館をはじめとした家業を小野川温泉で行っている者に限られる。

年齢は最年少24歳、最年長56歳、平均年齢は43歳である。委員長は37歳、副委員長は48歳であり、いずれも旅館業従業者である。委員長にS氏が選ばれた背景として、S氏は旅館組合青年部長として同世代でリーダーシップを発揮している点がある。そして役職柄、各温泉地との交流を通して、さまざまな温泉地の活性化についての豊富な情報と広い人脈を持っている点もある。また、50歳以上

の4名のうち、3名が小野川地区外部出身者である。年配のメンバーの半数以上が外部出身者であったことが、結果的に保守的な慣例にとらわれずに、若手の自由な議論と発想が理解され、実行された結果につながった要因と考えられる。

職業は、旅館業8人に対して、商店、土産物店、飲食店等の合計は9人で、非宿泊業の割合が多い。この中には、畳店や理髪店など、観光とは直接関わりを持たない業種のメンバーも含まれている。小野川温泉の場合、旅館は家族経営が主体で、旅館あたりの施設規模もそれほど大きくない。また、小野川地区の全戸数に占める旅館の割合も1割以下であるため、観光活性化を推進していく場合、非宿泊業従事者の理解と人材活用が不可欠なものになっている。

第2表 2001年発足時 観光知実行委員会

年齢	役職	性別	出身	職業	世代	前職	小野川を離れていた時期	小野川を離れていた時期の居住地	備考
56	委員	男	市外	旅館	第1世代	会社員	0-30歳	東京	観光業議会議長
52	委員	男	市内	商店	第1世代	会社員	0-26歳	名古屋	商業組合長・観光協議会副会長
52	委員	男	市内	旅館	第1世代	研究員	0-24歳	茨城県	源泉組合役員
51	委員	男	小野川	旅館	第1世代	なし(学生)	18-23歳	東京	旅館組合長・観光協議会副会長
48	副委員長	男	小野川	旅館	第1世代	なし(学生)	18-23歳	東京	
47	委員	男	小野川	土産物店	第1世代	会社員	17-25歳	東京	観光業議会議務局長
43	委員	男	小野川	旅館	第1世代	調理師	19-26歳	東京	旅館組合会計
42	委員	男	小野川	飲食店	第1世代	なし(学生)	なし	—	商業組合青年部部長
38	委員	男	小野川	商店	第2世代	なし(学生)	18-23歳	東京	観光協議会会計
37	委員長	男	小野川	旅館	第2世代	ホテル	18-24歳	東京	旅館組合青年部長
37	委員	男	小野川	製造業(畳)	第2世代	なし(学生)	18-20歳	茨城県	観光協議会庶務
36	委員	男	小野川	旅館	第2世代	会社員	18-35歳	仙台	旅館組合青年部支部長
30	庶務	男	小野川	旅館	第2世代	なし(学生)	なし	—	観光協議会庶務
47	委員	男	小野川	理髪店	第2世代	なし(学生)	18-20歳	東京	ホテル祭り交通係長
46	委員	男	小野川	商店	第2世代	なし(学生)	なし	—	商業組合庶務
44	委員	男	小野川	商店	第1世代	なし(学生)	なし	—	商業組合会計
24	委員	男	小野川	商店	第2世代	会社員	18-24歳	東京	

(現地での聞き取り調査より作成)

「世代」というのは、観光知実行委員会のメンバーが家業の経営にどのように関わっているかを表したものである。「第1世代」とは、親子で家業に従事している場合の「親」世代、「第2世代」とは「子」世代である。委員長をはじめ、40歳代の一部、30歳代、20歳代はいずれも「第2世代」である。家業の経営に大きな責任を伴わない比較的動きやすい立場の「第2世代」が観光知実行委員会のメンバーに多く連ねることで、会議の開催や共同での事業が支障なく進めることが可能になった要因として考えられる。

前職および小野川以外の地域での居住をみると、小野川出身のメンバー14人のうち半数を超える10人は高校卒業後、進学や就職等により一時的に小野川を離れている。そしてその半数が、家業を継ぐために専門学校あるいは大学卒業後に小野川へ戻っている。小野川

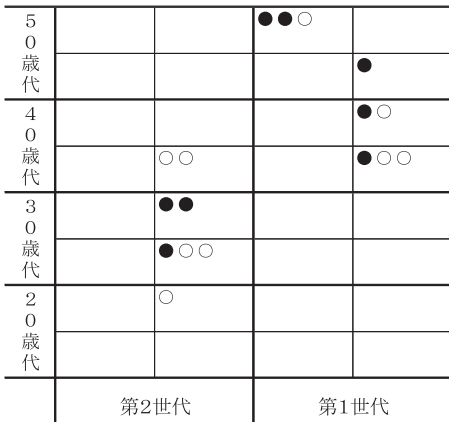
を離れた時期の主な居住地では、東京都が約半数を占めている。

(2) 観光知実行委員会の変化

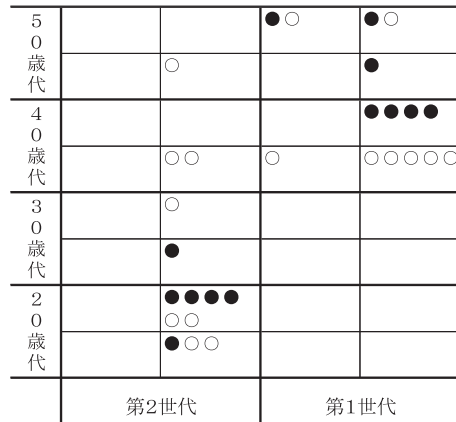
2005年4月時点の観光知実行委員会のメンバーは29名で、2001年発足当時より12名増加している。その中には発足当時のメンバー15名（そのほか、1名は隠居。1名は死去）が含まれている。

以上のようなメンバーの増加において、年齢、出身、前職がどのように変化したのかをまとめたのが第5図である。それをみると、その後の観光知実行委員会のメンバーについて、大きな特徴として以下の2点が挙げられる。まず、20歳代の大幅な加入である。これらはすべて小野川出身者である。そのうち、大学あるいは専門学校等へ進学し、小野川以外の場所で就職した後、再び地元へ戻り家業に就業する場合が半数以上である。このほか、

(2001年発足時 観光知実行委員会)



(2005年4月時点 観光知実行委員会)



前職あり	外部出身 + 前職あり	小野川出身 + 前職あり	● 旅館業 ○ 商店、飲食店、その他
	外部出身 + 前職なし	小野川出身 + 前職なし	
前職なし	外部出身	小野川出身	

第5図 小野川温泉観光知実行委員会メンバーの属性

高校卒業後、後継者として家業に就業する者が3名加わっている。もう1点は、40歳代の「第1世代」の増加である。これは、経営者世代である「第1世代」として新たに加わったメンバーが増加したことによるものと、世代交代により2001年時点の「第2世代」からその後「第1世代」になったことの2つに分けられる。

このほか、観光知実行委員会発足時には1人もいなかった女性がその後増加し、2005年4月時点では、メンバーの中に6名含まれている。そのうち、4名が20歳代の「第2世代」である。現在はまだ観光知実行委員会の中心メンバーにはなっていないが、今後は女性も活動の中核となっていくと思われる。

上記のいずれの特徴においても、メンバーが増加した要因として、2001年以降の小野川温泉の活性化への取り組みによって、入込客の減少が止まったことや、取り組みによって小野川温泉が注目され、外部からの評価が高まったことが大きく影響している。

5. おわりに

本研究では小野川温泉を事例として、中心的な役割を担った組織と個人といった人的側面への分析から、温泉地活性化への取り組みに関する一連の過程と現状を明らかにしてきた。研究の結果は、以下の通りである。

小野川温泉では2001年に鉄道会社と旅行会社共同による旅行商品開発の対象地に選ばれたことを契機として「観光知実行委員会」を発足させ、現在につながる温泉地活性化への取り組みを開始した。当時としてはユニークな5つのプロジェクトが商品として売り出されたことにより、メディア等でも注目を集め、それまで続いた入込客の減少に歯止めが

かかった。さらには、温泉地活性化の成功例として表彰を受けるなど、地域外部からも一定の評価を受けるなど、社会的効果も得た。

一連の活動の主体となった、観光知実行委員会の特徴と、温泉地活性化に果たした要因としては以下の点が挙げられる。まず、「第1世代」と呼ばれる親世代の旅館・商店等経営者の支持体制があった。その上で、比較的就業に余裕があり、フットワークの軽い「第2世代」と呼ばれる子世代が中心となって、委員会の活動を進めてきた点である。さらに、そのなかで、旅館を中心としながらも、小野川温泉のさまざまな職業に携わる人が実行委員会のメンバーとして加わることで、役割分担においてもスムーズに事業が進む要因となった。加えて、進学や他の仕事などで、一旦小野川温泉を離れた人が多い点である。一定期間、小野川を離れるなかで、「外部の目」「客観性」を持ち合わせたことも、その後の取り組み、活動に大きく影響しているといえる。

このように、小野川温泉ではユニークなアイデアを旅行商品とした、「ソフト」からの温泉地活性化に取り組んできた。ソフトは莫大な費用を必要としないため、比較的多くの人が活動に参加しやすいというメリットがある。実際に小野川温泉においてもさまざまな職種、年齢層からの人々の参加を得た。しかし、現在の小野川温泉では温泉街の景観が不統一で温泉情緒が欠けているといった課題も残されている。そこで2007年1月に、旅館組合事務所の外壁の改装を行った。さらに3月に「小野川温泉景観指針」を策定し、今後は温泉街の基調色を黒茶色に定め、景観整備を進めていくとの方針を打ち出した。一般的には、こうした「ハード」の整備はソフトの数

倍もの費用がかかるため、なかなか進まないのが多くの温泉地の実情であろう。小野川温泉の場合、これまでの観光知実行委員会等の取り組みでもわかるように、アイデアを生み出してからの結論と行動が早いといった特徴があることから、今後の景観整備が着々と進むことであろう。

冒頭で述べたように、現在わが国の温泉地は総体的に入込客数が低迷している。一方において、温泉地数は多様化しながら増加しており、温泉地同士の競争が激しくなっている。本研究で事例に取り上げた小野川温泉のように、個々の旅館がそれぞれに客を奪い合うのではなく、温泉地全体が同じビジョンを持ち、「小野川温泉」として取り組んでいくことが求められる。その際に重要なのは、いかにして旅館同士、土産物店や飲食店などが連携しあえるか、旅館組合、観光協会等の組織がまとまるかに温泉地活性化の成否がかかっている。

小野川温泉では温泉地活性化の中核を担う観光知実行委員会では、2001年の発足当時から2006年10月時点ではメンバーの入れ替わりも進んでおり、20歳代も活動の中心になりつつある。まちづくり、温泉地活性化の取り組みというのは永続的なものであり、今後もさらに小野川温泉の動向へ着目していくことが必要とされる。

〔付記〕本稿の作成に当たり、城西国際大学の溝尾良隆先生にご指導、ご助言を頂きました。また、現地調査においては、小野川温泉観光協議会の佐藤秀次会長、蔦 幹夫氏、観光知実行委員会の佐藤雄二会長をはじめ、小野川温泉の皆様に、多大なご協力を賜りました。記して厚く御礼申し上げます。なお、本稿の骨子は2006年立命館地理学会において発表しました。

(共栄大学国際経営学部)

注

- 1) (財)日本交通公社編『観光読本』、東洋経済新報社、2004、51～54頁。
- 2) 溝尾良隆『観光学 基本と実践』、古今書院、2005、89～97頁。
- 3) 観光経済新聞社主催の2006年「にっぽんの温泉100選」で4年連続1位の草津温泉は、選出の理由として温泉情緒が挙げられている。なお、2位には由布院温泉、3位には黒川温泉が続いている。
- 4) 同学会全国大会のシンポジウムは、「加賀温泉郷の未来像と課題」をテーマに行われた。
- 5) 研究懇話会は、「日本における温泉地と都市観光地の評価」をテーマに行われた。
- 6) (1) 山村順次「兵庫県湯村温泉の地域形成と活性化」、温泉地域研究3、2004、1～10頁、(2) 小堀貴亮・山村順次「国民保養温泉地・四万温泉の地域変容」、温泉地域研究5、2005、23～30頁。その他にも、山村は2000年以降、温泉地域の形成や変容に関する事例研究を多く発表している。
- 7) 前掲2)
- 8) 本編でも取り上げたが、小野川温泉は2002年10月に日本経済新聞プラス1温泉大賞の「まちづくり部門賞」を受賞した。
- 9) 小林裕和「温泉資源価値」と観光による地域づくり」、温泉地域研究2、2004、9～16。
- 10) 小野川温泉では地域のシンボルとして、ホテルを掲げており、小野川温泉のポスターやパンフレットにも更新する度にホテルが掲載されている。
- 11) このほか、資料によると、1587(天保17)年に伊達政宗が小野川に湯治したと伝えられる。さらに、米沢を居城とした上杉家も小野川温泉を利用したとされている。
- 12) 「米沢市観光レクリエーション基本計画報告書」は米沢市が(財)日本交通公社に委託して策定した。また、その後1986年に小野川温泉観光協議会が「小野川温泉整備計画」を策定している。
- 13) JTBとJR東日本では1996年度から両者の社長直属の組織として、「若手勉強会」を開催していた。その目的は、JTBの企画力と販売力、JR東日本の輸送力といった両社の強みを生かした観光地活性化を検討することであった。特に、住民の生活や文化を生かし、地域のホスピタリティを基礎とした観光地づくりを模索していた。2001年に小野川温泉を対象地に選んだのは第4期のメンバーである。
- 14) 小野川温泉観光協議会の蔦幹夫氏によれば、最終的に5か所の候補地から小野川温泉が選定

された理由は、「地元のやる気と熱意」であったという。

- 15) 例として、「夢ぐりプラン」での独楽の入浴手形は、2001年には当初の目標1,000個を上回る、3,200個を売り上げた。
- 16) 選定理由は以下の通りである。「小さな温泉街「小野川温泉」を魅力あるものにするため、

若手リーダーとして地域をまとめ、「夢ぐりプラン」「そぞろ歩きができる温泉街」「どこでも出前」をはじめとした数々の新たな試みを行い、短期間で小野川温泉を「そぞろ歩きができる温泉街」として全国から注目される温泉街に成長させた」。